

## 「文盲中国語」のすすめ

中里見, 敬  
山形大学教養部中国語研究室

<http://hdl.handle.net/2324/6467>

---

出版情報 : 山形大学教養部だより. 47, pp.9-9, 1993-10-12. Faculty of General Education,  
Yamagata University

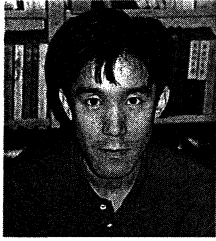
バージョン :

権利関係 :



## 「文盲中国語」のすすめ

中里見 敬



中国語は漢字を用いるため、日本人にはとりわけ身近に感じられる言語である。しかし、外国語として中国語をマスターしようとするなら、漢字はむしろ障害になることの方が多い。私自身の留学経験からみて、欧米やアフリカ出身

の中上級者は、おしなべて日本人の中上級者より中国語が達者である。日本人が音声→漢字→意味という回路で中国語を理解するのに対して、彼らは漢字という迂路を経ないのである。いちいち頭の中で漢字を思い浮かべていたのでは、言葉はいきいきと動き出さない。日本人学習者にとって漢字の干渉はきわめて重大である。

そうした反省をふまえて、最初の3カ月間の授業では、音声学に基づいた訓練を徹底するとともに、学生諸君にも耳と口から中国語に親しむように要求してきた。単調な授業に学生たちがどこまでついてくるか心配であったが、彼らは予想以上に発音練習を楽しんでいるようだ。その理由は、おそらく第一に声を出す喜びだろう。学生

諸君にとって、授業中これだけ声を出すのは小学校の国語や音楽以来の体験かもしれない。第二には、進歩が実感できることだろう。日本語にはない発音や声調を一つ一つ自分のものにしていく過程は、幼児が言葉を獲得するのと同じように、とてもスリリングな体験だ。

後期の授業では『児童三字経』というテキストを用いて、それこそ中国の小学校のような授業をしたいと考えている。三字一句の心地よい連続には、いかにも土臭い本物の中国語の香りが込められている。解放後の中国で文字を覚えるために編まれたテキストを、逆に漢字に頼らないで、音とリズムから中国語を身につけるために使ってやろうという魂胆である。

60年前、中国留学から帰国した倉石武四郎博士は「玄界灘に訓読を捨ててきた」と言って、従来の漢文教育を放棄して、本格的な中国語教育を東京大学で開始した。私の仕事もまず、山形大学の教室にはじけるような中国語の声を響かせることだと思っている。

漢字に頼らない「文盲中国語」とは、話せる中国語にほかならない。(なかざとみ さとし・中国語担当)